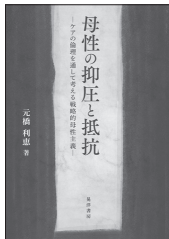


元橋利恵著

『母性の抑圧と抵抗』

——ケアの倫理を通して考える
戦略的母性主義』



評者：笹谷 春美

本書の問題意識と課題設定によせて

本書のタイトルは刺激的で挑戦的である。「母性」や「戦略的母性主義」をキーワードに本書は一体、何を問い、何を明らかにしようとするのか、思わず手に取ってみたいくなる一冊である。

著者の関心は、現代日本の母親たちの妊娠・出産・子育ての営為を支えている意識や心情（それを「母性」という）のあり方である。著者は当事者たちにとっても何となくあいまいで忙しい日々の子育てや仕事のなかで捉えきれない母性というものを真正面から取り上げ、本書を貫く中心課題に据える。評者は「母性」「母性本能」「母親業」などの言葉を使うことに躊躇を覚える世代であるが、著者にとっては、これこそ現代日本の母親やその予備軍の女性たちの抱える不安やジレンマを解き明かすためのキーワードであり、その現状を自ら変えようとするエンパワーメントに関わるキー概念なのである。このような考えを著者は「母性」・「ケア」・「個の自立」の関連を問うてきた欧米のフェミニズムの理論検討を通じて導き出す。従来、フェミニズムは女性（母）が担うケアを女性の自立を妨げる阻害要因として否定的に捉え

てきたが、そうではないあり方——女性が担ってきたケアを再評価し「個」の確立とは矛盾しないあり方を提案するケア・フェミニズム論を本研究の理論的視座として導き出す。

ところで、現代日本の母親たちの状況はどうであろう。いったん妊娠出産すると、そのケア労働と責任は女性に否応なく押し付けられる。その一方で家族の経済的状况はどうであれ働いて自立的に生きていきたいという要望を叶えることが困難な状況が続いている。何しろ“妊娠・子育て中の母”という存在自体が労働市場はじめ社会的領域から厄介者扱いされ排除される。孤かなワンオペ育児が拡大している。「母性」と「個」の対立は深まり先鋭化してきている側面は見落とせない。その一例が著者も触れている「保育園落ちた、日本死ね!」というある母親の匿名のブログであろう（2016年2月）。この怒りの発信は様々な批判と共に多くの共感を得、安倍政権の待機児童対策に少なからずの影響を与えた。このインパクトある発信には、とうの昔に子育てを終えた評者も心から共感した。40年前と状況は何にも変わっていないのか？ 暗澹たる気持ちになった。しかし、彼女はまだ怒りをSNSで発信しほんの少しでも社会的影響力を与える事も出来た。一方、このような手段や力も持たない母親たちはその怒りやイライラをどこに向けるのか？ か弱い我が子に向けられるのではないか？ 子殺しや虐待事件が後を絶たない。このような状況が良いわけがない。著者の問題意識もここにある。その背景には女性の自立を謳いながらそれを可能にする育児や介護へのサポート施策があまりにも貧弱な政治に原因があることは否めない。それと共に、と言うより共犯的に強調されてきた「自己責任論」の風潮があることに著者は注目する。欧米の福祉国家の再編政策の中心的柱である財政抑制政策として導入された新自由主義の

理念と手法は、日本でも2000年代初頭に導入され政治や経済のみならず教育・福祉・医療・家族等あらゆる領域を含みこんだ。その最悪の例は「ここに駆け込んでくる若い女性たちは、なんでもかんでも自分でやらなければならない」と思っている。自立や女性活躍が叫ばれる社会風潮の中で、それができない自分が悪い、と自分を責める。誰かを頼ったり助けを求めることをしない」というある女性相談員の発言に象徴される。著者はこのような社会状況における「母性」を、「自己責任化した母性」あるいは「産み育ての自己責任化」とネーミングした。

加えて著者の関心はこれに留まらない。先述した理論分析から導き出された「母性」が持つ政治変革力の可能性である。その実証研究の対象として戦後日本の母親運動を取り上げる。とりわけ、母親として子どもを守り育てたいという要求から、戦争反対・平和をスローガンに掲げる二つの団体の分析である。これまでアカデミズムでもマスメディアでも本格的かつ正当に取り上げられることの少なかったこれらの母親たちの運動に着目したことを高く評価したい。しかし、1950年代の第五福竜丸の被爆に端を発して創立された「母親大会」と2015年の安保法制改悪強行に反対して立ちあがった「ママの会」ではその時代背景や運動の歴史、参加する女性像も異なるであろう。しかも「母親大会」の分析は1960年代までであり、比較分析の検証に耐えられるかどうか疑問である。一方で著者と同世代の「ママの会」の参加者へのインタビュー調査によって、その政治的活動に関わるきっかけや要因を彼女たちの語りのなかから引き出したのは成果であった。彼女たちの生の声はこの社会の政治的土壌や風潮を反映している。これらはリアリティから出発するための貴重な資料である。それにしても、「家の近くで活動するな」「子どもがいじめられたらどう

する」「共産党に入党したのか」と言う夫たちの発言を、戦後77年たった今日でも若い彼女たちから聞かされるとは――。改めて、長期の家父長制政治の温床を垣間みた。本書は「母性」研究を柱にしながら上記のような重層的な課題設定とその解明に挑み、今日の女性たちが直面する「妊娠出産・育児・ケア」の危機の解決の一端を担うことを試みる意欲作である。

本書の構成と概要

本書は重層的な課題分析を反映し3部構成になっている。第I部は理論編、第II部と第III部は現状分析編である。

序章（なぜ母性研究なのか）では、本書の問題提起と言葉の定義および分析枠組みが提示される。

第I部では、1980年代以降の欧米の母性論およびマルクス主義フェミニズムの批判検討を行い、母性を女性抑圧の元凶として否定し自立的で主体的な個としての女性像と対峙させる従来の理論ではなく、女性が母として従来担ってきたケアの営みを、他者への責任に基づいた葛藤、思考、実践と捉え、人類社会の再生産に必要不可欠な営みとして再評価することを提案するケア・フェミニズムの論理を積極的に評価する（第1章）。女性たちや母親たちの現実生活のリアリティから捉えてゆくことが、ケアを脱ジェンダー化しジェンダーに起因する不平等や支配構造を巧妙に隠し女性の営みを後景化する政治に対抗する力となり得るのではないか。つまり母親業の実践に政治的価値を見出そうとするサラ・ルディクの主張等に依拠し、著者は、母性の「自己責任化」に対抗するための「戦略的母性主義」と呼ぶ視座を得る（第2章）。

第II部では、第I部の議論を踏まえて、2000年代以降の日本における母性の抑圧の内面化の実態とそれが正当化されるロジックを「母子健

康手帳」と副読本の分析を通して具体的な検証を試みる（第3章）。加えて2000年代以降の女性のセックス観について分析する。女性誌『an an』などの当時のトレンドなメディア分析を通して得た傾向を「新自由主義セクシュアリティ」とネーミングし、そこにも隠れた抑圧があることを明らかにする（第4章）。

第Ⅲ部では、母性の抑圧への抵抗の事例として戦後日本の母親運動に着目する。対象事例は、1950年代に発足し今なお多くの多様な政治的課題を発信し続けている「母親大会」と2015年に安倍政権による安保関連法案の強行採決に反対、というシングルイシューで立ちあがった「安保関連法に反対するママの会」である。二つの運動の特色を比較し母性を戦略とする社会・政治活動への参加の多様なあり方を明らかにし（第6章）、更にいわゆる「母性の自己責任化」を内在した世代が、固定的な組織を持たずSNS等で繋がる「ママの会」の参加者へのインタビュー調査（13名）を通じて、彼女たちが母親業を通して政治的エンパワーメントを獲得してゆくプロセスを明らかにした。同時に、活動を躊躇させる周囲の眼差しや批判にも抗いながら行動する複雑な心情を掬い取った（7章）。

上記の一連の分析を通して著者は、新自由主義下において「自己責任化」された母性への抑圧の対抗軸として以下の3点を挙げ、「戦略的母性主義」による政治実践の可能性を確信する。①他者の生命の尊厳への関心を基盤とした政治への打ち出し、②政治的パターンリズムへの対抗としてのマターナルな政治実践、③母親たちによる「母親業」を通しての連帯（終章）。

疑問と期待

著者は終章で本研究の限界点と今後の課題について多岐にわたり述べている。ここではそこ

には十分に触れられていない幾つかの疑問と今後の課題について、著者への期待を込めて述べてみたい。

第1は、第Ⅱ部と第Ⅲ部の実証分析の手法についてである。

第Ⅱ部第3章では、「妊娠出産の自己責任化」を母親たちが内在化するロジックを「母子手帳」と副読本を用いて分析している。しかし実際には母親たちは「母子手帳」だけでコントロールされるわけではなく、周囲の人々や他のメディアによっても影響を受けるのではなからうか。実際にどれだけのどのような母親たちが「母子手帳」で強調される課題を内面化できたのであろうか。

これは第4章の「新自由主義セクシュアリティ」の分析にも連なる。ここで用いられる資料は、主に北原みりの女性誌『an an』の分析であり、第2次資料である。確かに『an an』は一時期、一世を風靡した女性誌であろうが、その購読者数はどれだけであったのだろうか。どれだけの若い女性が影響を受けたのだろうか。他にも異なるセックス観の主張はなかったのだろうか。「新自由主義セクシュアリティ」や「自己責任化する母性」の析出をより補強する資料も欲しい。

評者が大きな関心を持ったのは第Ⅲ部である。従来アカデミズムにもマスメディアにも取り上げられることが少なかった戦後の母親運動に焦点をあて、戦略的母性主義による抵抗の力の可能性を実証する試みは評価したい。男性中心主義社会においては女性たちの異議申し立ては、どうせ女の言うことと、低く見られ無視されがちである。男性の既得権益に触れるものなら敵視され攻撃に晒されることもある。

「生命を生み出す母親は生命を育て生命を守ることをごみまます」と高らかに宣言した母親大会と「だれの子どもも殺させない」をスロー

ガンとした「ママの会」は、戦略的母性主義に依拠した活動の好事例である。しかし、ケアをしない男性の発想からは出てこない極めて人間的な様々な要求を長年掲げ続けてきている母親大会については、残念ながら本書の分析は1960年代までに留まり、主に使われた資料は大会のスローガンとマスコミの言説であり運動への参加者たちの生の声は拾い上げられていない。何故これまで長く続き発展しているのか？母親を売り物にした運動はフェミニズムに値しないという評価もあるが、この運動のなかから自立した個を求める女性たちも多数生まれている。母親大会は個々の課題を有した団体の集合体である。組織論的な分析や要求課題の変化等を通じて、この運動の今日的意義などが考察されてほしい。これに対して比較対象としての「ママの会」は発足からまだ間もなくその評価も流動的である。参加者のインタビューは13人と少なく代表制は低い。従って事例研究としても限界的であるが、インタビューによって生の声が収集されたことは成果である。二つの団体は分析時期とその手法が異なるため、得られた知見は慎重に評価したい。

第2には、母性研究の視座と枠組みの拡大についてである。

「母性」は期待される母親像でもあり当該社会の為政者の社会統治に適合的に作られる社会的構築物である。従って、そこには当該社会に望まれる次世代の育成がセットとしてインプットされている。母性論はケアする女性個人の問題ではなくケアする相手、言い換えればケアされる側やそれに関わる人々との関係も含むものであろう。本書ではこの点への眼差しは

弱い。母性研究は女性・母親視点ファーストであるのはやむを得ないのだろうか。その意味では、抑圧に対抗する戦略的母性主義はストレートに政治活動に向かうばかりでなく、家庭内や地域社会などの身近な抵抗勢力の変革に向かうルートはどのように想定されるだろうか。

同時に時間的視座も期待したい。「産み育ての自己責任化」の下で子育ての営為を重ねる女性たちも年を取る。子育ての後に親の介護や配偶者の介護問題がやってくる。自分が介護される状況も見据えなければならない。その時に2000年代初頭に「自己責任化した母性」はどのように作用を及ぼすのだろうか？想定以上の大介護時代、家族構成の激変の下で、今や在宅介護者の3割は男性である。ケアは女性の専売特許の時代ではなくなってきている。誰が担ってもおかしくない、たまたま自分しかいなかったという意味でのジェンダーレスの時代が現実化してきている。とはいえ、介護の主たる分担と場所は女性・在宅という規範は根強い。男性介護者の苦悩はここにある。孤独な介護、介護と仕事の両立等の困難は、子どもを抱えた母たちと共通点が多い。困難を抱え抑圧された介護者たちの対抗はどこに向かい得るのだろうか、その際ケアの内実（排泄、食事などの世話等）と倫理はどのように担われるのか、ケア・フェミニズムを理論的武器とした考察を期待したい。

（元橋利恵著『母性の抑圧と抵抗——ケアの倫理を通して考える戦略的母性主義』晃洋書房、2021年2月、viii + 217 + 17頁、定価4,290円（税込）

（さきたに・はるみ 北海道教育大学名誉教授）